

生産者からみた環境保全米生産の拡大要件

西 倫生

キーワード：環境保全型農業、環境保全米、有機栽培、農業生産者

1. 問題意識と課題設定

近年、地球環境問題への意識の高まりを受け、農業においても環境保全の取組みが注目され始めている。農政においても、環境保全型農業は、農業全体として目指さなければならない目標として位置づけられ、取組みに対し政策的な支援が必要であるとの認識が高まると共に、農業生産者にも環境基準遵守へのよりいっそうの取組みが求められるようになった。同時に、環境保全型農業は、農産物市場のグローバル化とそれに伴う農産物価格の下落等、農業をとりまく環境の変化に対応する手段の一つともなりうる可能性を示している。さらに、環境保全型農業の取組みは、消費者からも評価されている。このような状況の中、日本の農業全体に環境保全を重視する取組みを拡大するためには、環境保全型農業の継続・拡大を阻害する問題を把握し、生産拡大のための要件を明らかにする必要がある。本論文では、全国的にみても、環境保全型農業の取組みを行う生産者によってブランド化の努力がなされている環境保全米に注目して、考察を加えることとした。

2. 本論文でとりあげる環境保全米

本論文における環境保全米とは、減（無）農薬・減（無）化学肥料栽培、冬期湛水、水田ビオトープの構築等、水田周辺の生態系保全に配慮した取組みを行いながら生産され、販売時にその取組みの意図について説明されている米をいう。本論文では、滋賀県高島市を調査対象地とし、そこで栽培されている、「環境こだわり農産物」（米）、「魚のゆりかご水田米」、「たかしま生きもの田んぼ米」、有機 JAS 栽培米、特別栽培米（無農薬・無化学肥料栽培）について聴き取り調査を行った。

3. 結論と考察

聴き取り調査と考察の結果、以下の結果を得た。

環境保全米生産者は、労働や圃場条件の制約のもとで、収益を最大化するという目的を実現するために、生産する環境保全米の種類や生産規模、販売方法を選択しているといえる。生産者が生産する環境保全米を選択する際には、農法の目指す趣旨に納得していることや、環境保全米の謳う理念に共感していることが重要である。環境保全米生産においては、収量の減少や労働投入の増加が見られるため、価格プレミアムや補助金は環境保全米生産の拡大要件として一定の意味を持つと考えられる。

環境保全米の需要が限られていること、除草作業が困難であること、環境保全米として評価されない品種が存在していること、これらのことは、環境保全米生産の参入・拡大の障壁となっている。また、米以外の作物を中心に栽培している生産者や兼業農家では、環境保全米へのこだわりを持つ生産者はごく少ない。これらの環境保全米生産の参入・拡大障壁を取り除くためには、環境保全米生産に強い関心を持つ専業農家への農地の集積が、大きな役割を果たすと考えられる。